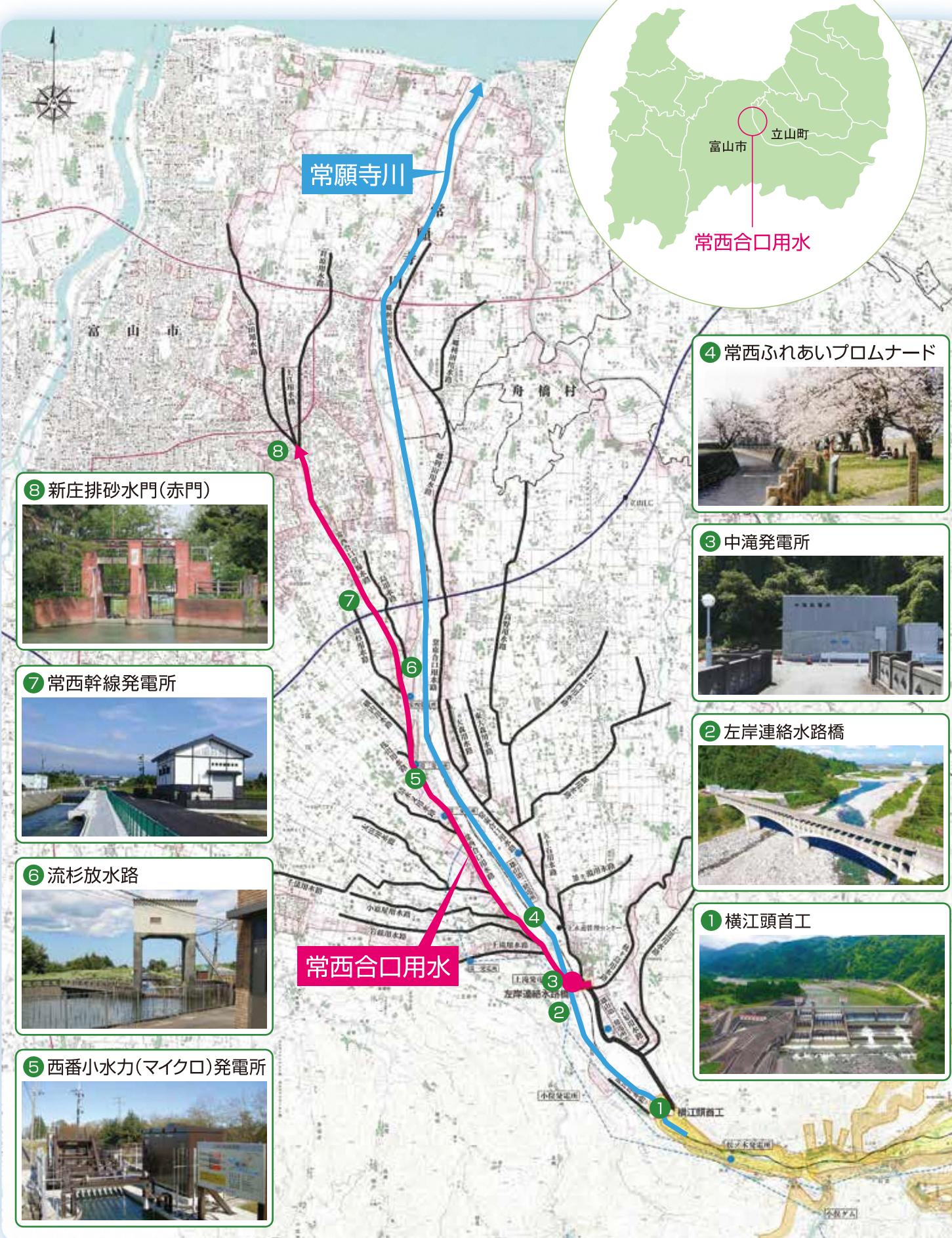


常西合口用水施設マップ



世界かんがい施設遺産 常西合口用水



登録証文章(和訳)

日本の常願寺川流域に位置する常西合口用水は、地域の農業、水資源の開発とともに、公共上水、工業用水、水力発電への用水供給を果たしてきた必要不可欠な構造物として、ICID世界かんがい施設遺産に登録する。



世界かんがい施設遺産とは

かんがいの歴史・発展を明らかにし、理解醸成を図るとともに、かんがい施設の適切な保全に資するために、歴史的なかんがい施設を国際かんがい排水委員会(ICID)が認定・登録する制度のことです。

世界かんがい施設遺産 常西合口用水

令和2年12月8日(火)に、Web会議で開催された
「第71回国際かんがい排水委員会(ICID)国際執行理事会」において、
「常西合口用水」が「世界かんがい施設遺産」として富山県内で初めて登録されました。



現地調査するデ・レーケ



用水の開削工事



鷹泊屏風岩の第1隧道取水口



第2隧道入口



上滝沈砂池



新庄排砂水門

常西合口用水の歴史

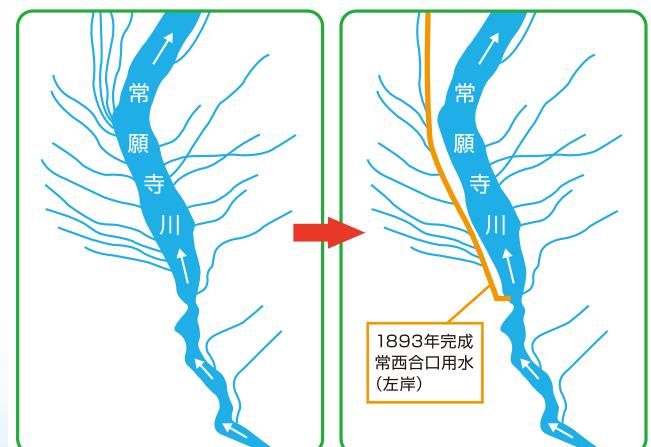
～国内屈指のあばれ川を克服した日本最古の大規模合口用水～

常西合口用水は、富山県富山市を流れる延長約12kmの用水路で、世界有数の急流河川である常願寺川の左岸を並走しており、農地約3,300haにかんがい用水を供給するとともに、上水道や工業用水の他、水力発電にも活用されるなど、地域の暮らしを支える大事な農業用水です。

明治以前、常願寺川の両岸には数多くの用水と取水口があり、特に流れの強い左岸側においては、洪水の度に多くの取水口の崩壊や土砂埋没により、氾濫が発生するとともに、甚大な農業被害が続出していました。この度重なる河川の氾濫を防ぐため、内務省技術顧問のオランダ人技師ヨハネス・デ・レーケは、常願寺川の治水計画に併せて、常願寺川左岸にある12の用水の取水口を廃止し、上流の安全な箇所に合同取水口を設置する「用水の合口化」を明治24年(1891年)に提唱し、翌年には同用水の開削工事に着手しました。

当時、同用水のかんがい面積は約5,000haに及び、このような大規模な合口化は全国でも初めての試みで、12kmの幹線水路、2ヶ所の隧道や沈砂池等を含む数々の工事は非常に困難を極めましたが、1万人以上の作業員を県内外から動員するなどして、わずか2ヶ年という短期間に同用水を完成させました。同事業は、その特殊性や規模などから近代農業土木史に残る大工事であり、以後、常願寺川右岸を流れる常東合口用水との両岸を一体とする合口化への展開を含め、県内各地で合口化が進み、水争いの解消や取水の安定化の効果等により、県内全域で稻作の増産が図られ、全国屈指の穀倉地帯の発展に繋がるとともに、全国各地で河川改修に付随した合口化が進んでいきました。

また、同用水の下流では度重なる洪水により流れ込む土砂対策として、明治33年(1900年)に新庄排砂水門が造成されました。同水門は赤煉瓦で構築され、「新庄の赤門」の名で長年にわたり、地域の住民から親しまれています。さらに、常願寺川の氾濫を防ぐために戦国時代に築かれた「佐々堤」が同用水の底面に残っており、今も当時の姿を偲ばせるほか、全国に先駆けてやすらぎのある水辺空間の整備を図り、歴史的にも景観的にも県民にとって貴重な施設となっています。



新庄排砂水門「新庄の赤門」



憩いと集いの場



河床に見える佐々堤



殿様林